ドクター井口のつぶやき その㉚

うどんのお汁

井口昭久

テレビで麻雀の実況中継をやっていた。ぼんやりと眺めていると、大学を卒業してすぐに赴任した病院を思い出した。

「ロン!!」とM先生は大声を出した。大三元であった。しかし自分の手元に待っていた牌がないのに気が付いた。「ない―ない―パイがない!」と先生は麻雀卓の下を覗きこんだ。

病院長のM先生は、一代で巨大な組織と病院を作りあげた伝説に残る人であった。アメリカで長年にわたり医学研究に携わった経験がある内分泌学の大家であった。実験の方法などについて教えてくれた、私の恩師であった。大食漢で、大きな頭をしていた。

夕方になると、医局に集まって麻雀をするのが日課であった。

その日、私は先生と麻雀卓を囲んでいた。先生は、「白（ハク）」をポンした。麻雀はポンをすることによって完成までのスピードが早くなる。「麻雀は大きな手で早く上がらにゃ」が先生の口癖であった。時には小さな手で遅く上がることもあったが、そういう時には「人間、同じことばかり言っていてはイケマセン。朝と夕方には違うことを言わないと、進歩がない」と言った。

その頃の私にとって、先生の言われることは、教祖様のお言葉のように聞こえた。

「家族同士の付き合いはしてはいけません。奥さん連中の仲が悪くなると、何ともしょうがなくなります」

先生は次に「中（チュン）」をポンした。

「井口さん、うどんのお汁は全部飲んでもいいんだよ」

先生はうどんの汁を全部飲みながら言った。

「同僚の医者を先生と呼ぶのはやめましょう。先生と呼ばれる職業にロクなものはない」

そこの病院では医者を「さん」で呼んでいた。ついに先生は「發（ハツ）」もポンした。先生は白をなき、中をなき、發をなき、そしてイーソも、ポンをして、手元には「南（ナン）」が一枚だけ残った。南の単騎待ちであり、南が出れば上がりであった。先生はその牌を右手の上の方に置いていた。その位置は自摸るべき牌が並べられている山の端っこの辺りにあった。

右隣はK先生であった。知能指数に関心が高い先生で、「井口さん。君の知能指数はいくつ?」と聞かれるのが私は嫌だった。K先生の左手は山の傍にあったM先生の南に向かって伸びて、それを掴んで、そのまま捨てた。自摸ったつもりの牌はM先生の牌であった。大三元であった。M先生は興奮して「ロン―」と叫んだが、手元を見ると自分の牌は消えていた。

「実験はやってみなければわからないことばかりだよ、井口さん」と先生は言った。

M先生は数年前に亡くなった。病院も、先生の頭と共に消えてしまった。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）

北イタリア・ドロミテ